

滲出性中耳炎

《概略》

鼓膜の内側に滲出液がたまり、聞こえが遠くなる病気です。
主に子供に多くみられますが、大人にもあります。

《症状》

難聴が、代表です。耳の詰まった感じ（耳閉塞感）も多くみられます。

ただし幼少児では、的確な表現ができないため、何となく耳を気にしたり、周りの話に無関心だったり、返事をしないということも多くみられます。痛みを伴うことが、少ないため、そのまま放置し、実は、難聴が進んでしまっていることもあります。

また、赤ちゃんでは、理由もなく、ご機嫌の悪いこともあります。

《原因》

一般的に経過の長いことが多く、そのほとんどが、鼻の病気(アレルギー性鼻炎・副鼻腔炎・慢性の鼻かぜなど)を併発しており、鼻と耳をつなぐ耳管を通じ、鼻の細菌・炎症が、継続して刺激を与え、鼓膜の内側（中耳腔）に炎症を起こし、滲出液がたまり、難聴をきたします。

《検査》

聴力検査と鼓膜の動きの検査を併用します。1～2ヶ月に一度位検査をして経過をみていきます

幼児で聴力検査のできない時は、鼓膜の検査だけをしたり、必要なら、ABR という脳波を利用した検査もあります。



《経過》

急性中耳炎後におきたタイプは、比較的早期に治ります。気が付かず、慢性に経過した例や鼻の病気を合併している例は、一般に長びきます。通院回数にもよりますので、子供の訴えがないからとあまり放置しておりますと難治性に移行することもあります。

ただし、年齢とともに免疫機能も向上してきますので、自然治癒する例もあります。幼少児の長引く風邪は、鼻の病気とともに耳の方にも気をつけてください。

《治療》

耳管を通じて炎症が伝わり、中耳腔に滲出液をためますので、鼻から耳へ空気を通して中耳腔を滲出液から空気に置換していきます。具体的には、器具を利用して直接、耳管に空気を通します。また、小さな子供は、「ハック」といいながら、ゴム球を利用し空気を通します。

いったんたまった滲出液は、簡単に抜けないのでこの方法だけで不十分な患者さんは、経過をみながら、直接、滲出液を抜いたり（鼓膜切開）、その後に鼓膜にチューブを入れたり（チュービング）することもあります。さらに扁桃やアデノイドが原因で耳管の換気を邪魔している時は、手術で切除することもあります。いずれにしろ、治り具合は、個人差がありますので特に経過の長い患者さんは、病気の性質をよく知り、しっかり治してください。

また、幼児の場合、いったん治った滲出性中耳炎が、風邪引きとともにぶり返すこともあります。

はなみ会HP

<http://hanamikai.com>

